

# Fグループ会報

No. 12  
フェリス女学院短期大学  
音楽科  
Fグループ

## モーツァルトについて

(その2)

小林 道夫

(前号よりの続き)

皆様にお薦めしたい本でエドヴィン・フィッシャーの「音楽を愛する友へ」(新潮文庫)というのがあります。この本にモーツァルトについて種々語った部分があるのですが、なかなか為になることが書いてあって是非一読をお勧めします。その中に、ピアノの音色は人間の指がつくるものであるから当然弾く人によって、又弾く曲の種類によって異なるものである。それはどうということかという、ピアノ自体が割に中性的な音を基本に持っているのに逆にいろんな色を塗ることができるということだ。という意味のことが書いてあります。ではその中性的な音はどうやってつくるのかということ、今お話しした(前号参照)基本的な指の動きから生まれてくるわけです。最初からいろんな色で仕事をしていくと何をどうしてよいか、わからなくなってしまう。無色透明なスケールが弾けるようになってくれば、あとはそれにちよつとした調味料を加えるだけでいいわけです。何も無いところから仕事をしていって、その上にいろいろ積んでいく方がはるかに楽で、又できる範囲が広がっていくと思います。是非試してみてください。

### —エディションについて—

さて、では指ができて軽い音で、きれいなスケールが弾けるようになったとして、それではモーツァルトを弾こうとなった時に問題になるのが楽譜の版の問題です。

ない。つまり人間の神経が一つ一つの音についていける程度の限度までしかテンポはあげられないということです。いずれにしても意味が明確に出て響きがクリアー、歌える範囲で内容をはっきり伝えられるテンポが大切です。

### —アーティキュレーションについて—

音楽のしゃべり方、アーティキュレーションですが、これもモーツァルトが書いたものを尊重してほしいと思います。小さなスラーの意味は17世紀と18世紀で逆になりました。17世紀では後の音の方が大きくなっていたのが、18世紀になってスラーの頭が大きくその後は力を抜いて弾くというのが普通になりました。ただ我々はどれもそれを誇張してスラーの頭はいつもアクセントと捉えがちになってしまいます。それから譜面のあちらこちらに点だのダッシュ(●▼■)だの出てきますが、それはだいたいにおいてスタッカートとみていいと思います。ただ場合によってそこにストレスがあるという意味、あるいはビート感覚、又、大事な音だということを示すためにそのようなものを書くこともありますので注意して下さい。アーティキュレーションの問題は大変むずかしくて、それだけで10回ぐらいの講義になりそうなのであまり触れませんが、モーツァルトがどのように書いたかということには大いに興味を持って頂きたいと思います。

### —裝飾について—

最後に裝飾の問題です。トリルというのは普通後打音を持ちますが、モーツァルトの場合、それを小さな音符あるいはもっときちんとした音符で書いてあることが多いです。例外は、カデンツをとらない、ただ二度で下がってくる様な音型についたトリルで、これには後打音は付きません。前打音は4分音符、8分音符、16分音符いろいろな音符でかいていますが、一つ注意したいのは、前打音を彼は、*♪*とかいたのです。モーツァルトは8分音符の速い前打音 *♪* はかかなかったそうですから、*♪* があつたら *♪* の間違いだと思っていそいそです。その当時の一般的な規則というのは、例えばレオポルド・

私はやはり原典版をお使いになることをお勧めします。他の人がいろいろ書きこんだものもそれなりに役には立ちますが、我々が一番知りたいのは、モーツァルトが書いた記号、彼が何を意図したかということです。特にソナタに関する限り、私が安心してお勧めするのはウィーン原典版です。変奏曲の場合は、この版でもいいのですが、この本にしか出ていない曲があるという曲数の問題でヘンレ版を挙げておきます。

### —ダイナミックについて—

こうした版を使う場合、モーツァルトの譜面はスラーも少なく、*f* も *p* もたまに散らばっているだけで *cresc.* も *decresc.* もありません。そうした際一番気をつけることは、書いてあるダイナミックの意味をよく考えることです。我々はどうしても固定観念を持ってしまっていて *f* とみるとりあえず大きい音でと力を力ませてしまう。もちろん曲によっては、*f*、*p* そのままの意味のこともあります。ただ単に大切に弾いてほしい、あるいはコントラストを示していることもあります。それをよく見分けて頂きたいです。それから、*cresc.* *decresc.* が無いということは、バロック時代はチェンバロが演奏会で最も一般向けであり、当然ダイナミックは段階的だったわけです。その間の移り変わり、調ゆる *cresc.* *decresc.* が出てくるのはシューベルトあたりからだということです。モーツァルトはバロックとロマンティックの中間点にいた人ですからその両方のやり方を知っていたわけです。ですから *f* と *p* の差というのは、あるときははっきり分れていなければならない、又、あるときはつながりがなくてはならない。ただ、分類すれば比較的是っきりと分

モーツァルトの「ヴァイオリン教本」とか C・P・E・バッハの「正しいピアノ奏法」などにかいてあります。それによると、前打音を付けられた音符が真二つに分れるときは半分、三つに分れるときは前打音はその弱をとるのが普通だとされています。それから上向きの前打音、遠い音程をとる前打音は短い場合が多いとのこと。ただこれはあくまで原則ですからそれを参考にその場に応じて判断して頂けたらと思います。

C・P・E・バッハの本の中に、今の時代には主題が再び戻ってきたときには決して同じに弾かず飾るということが前提となっている。その飾りで演奏者の音楽性が出てくるのだ。というようなことが書いてあります。彼が活躍していた時代はモーツァルトとどぶっているわけですから、同じことをやったときに多少の変奏は当然あったと思われる。無理にやるのはいけません、皆様も弾いてそうした衝動が起きましたら是非お試しになって下さい。

では最後に現代ピアノで熟達した人がモーツァルトを弾くとどうなるかを聞いてみたいと思います。演奏者は先ほど彼の本を紹介しました、エドヴィン・フィッシャーで、曲は K. 330 のソナタです。

### —演奏について—

彼の演奏を聴いていると、モーツァルトの人間とが感じ方を非常に大切にしているような気がします。もちろん技術的にすば抜けた音は一つもなく、速いスケールを弾いてもその中の一つ一つの音が全部うたっている。それでいて全体がとてもしずかりとしていてすばらしい演奏の一つだと思います。モーツァルトの演奏を現代のピアノで弾いたら多分こういう風にやるのが一番いいのではないかといつも思っているレコードです。私の頭の中にあるモーツァルト像はだいたい彼の演奏のあたりにあると思っ頂いて結構です。どんな作曲家についても云えることですが、その人の作品を演奏しようと思ったら、そのジャンスのものだけやっけてもだめです。特にモーツァルトは非常にそれが大切で、ソナタを勉強して絶対におこなったところがトリオを

れているときの方が多ようです。それからもう一つモーツァルトは当然使用していた楽器の表現範囲内で仕事をしていたわけで、いくら *f* と書いたところで自ずと限界があったと思います。ただ人間の感覚は時代と共に変化していくわけですから、現代のピアノで演奏するときには、ハンマー・フリーゲルの *f* 以上の音を出してはいけないというのはナンセンスだと思います。もちろん基本的にモーツァルトには体一杯の激情をぶちまけるといったような表現はないだろうということは云えます。

### —ペダルについて—

次にペダルですが、先ほどの訓練で指ができてくると、モーツァルトに関する限りペダルがなければならぬということとはほとんど無いに等しいと思って下さい。ペダル無しで音楽を加不足無く表現できるということです。人間の足首というのは決して器用なものではなく、ましてやこの時代はだいたい膝ペダルであった訳ですから、ペダルに頼ったということは絶対にはないと思います。ペダルはあくまでも音楽を語る上での一つの助けであると考えてはいかがでしょう。

### —テンポについて—

さてテンポですが、モーツァルトを弾く上での絶対的なテンポというのは恐らくないと思います。ただ極端ということは避けなければいけません。特にアダージョ、ラルゴなどの遅いテンポはどちらかという、ロマンティックにやたらと遅い方へ引張っていく傾向がありますから、遅い曲は遅くならないように注意して下さい。速い曲はいくら速くても一つ一つの音全部が何かを語っていなければならない。機械的なものが出てきてはいけ

やってみてわかったり、シンフォニーを聴いて感じがつかめたり、オペラを伴奏してその軽さを知ることができまします。ですから鍵盤しかおやりにならない方もそうしたレコードをよくお聴きになれば、恐らく急に世界が広がるという体験をなさると思います。以上、いろいろまとまりがありませんでしたが、少しでもモーツァルトを弾く足がかりとなって頂ければ幸いです。

ありがとうございました。

56年度研修会講演より 文責 鈴木みどり (27回)

## ベートーヴェンと食卓

村田 晶乃 (8回)

「音楽を理解するということは、いったいどういうことなのでしょうね。」

昨年11月30日に行われた研修会での黒岩英臣氏の講演は、この問いかけで始められました。

黒岩英臣氏といえば、11年間の修道院生活がまず思い出されますが、私がはじめて氏の演奏を聴いたのは、一昨年の秋でした。猛烈なあらしの吹き荒れる夜、県立音楽堂で「3つのピアノ協奏曲」が演奏されましたが、そのとき新日本フィルを指揮したのが黒岩氏だったのです。そのときから黒岩ファンとなった私は、講演会当日はぜひいい風にもめばず、会場へ参りました。

講演の目の前に現れた黒岩氏は、神父様のような柔和な眼差しで、なんの気負いもなく、たんとと私達の心に語りかけてくれました。指揮棒を持ったときはいくぶん、勝手の違うようすで……。

「バラの絵を見たとき、それがバラであることはだれにでもわかる。音楽にはそういうわかりかたはないですね。でもそれで、その絵がわかった、といえるのでしょうか? バラをとおして作者が何を語りようとしているのか、それをわかってとすれば、それが音楽のわかり方と共通している点でしょう。」

「人間的な時間、心の底に沈没するもの、発酵して浮かび上がってくるもの、それが音楽との出会いによってなに

かがわかる、というのが音楽の理解のしかたでしょう。」

そのあとは本題の「ベートーヴェンと食卓」に入り、

“招待されたパーティーを断ることはなく、好物の魚、(すずき、タラ)を先方へ届けておくほど魚料理を好んだ。”

“肉のシチューにパンを入れていっしょに煮込んだものや、家政婦の作ってくれる10コの鶏卵でつくった巨大なオムレツを楽しみにしていた。”

“友人を招待し、自分の胸筋を披露したもののとても食べられる代物ではなかった。”

“ウエーバーが彼を訪問したとき、友愛をもって迎えたいへん心のこもった昼食を共にした。”

「もともとベートーヴェンは人なつっこく、暖かい、気さくな人柄だったということがよくわかります。なぜ彼が変人といわれるようになったか。それは耳の病が原因でしょう。名声高かった彼は、そのことを隠していたかった。そのため故意に人を遠ざけたり、傍若無人にふるまったりしたのではないのでしょうか。」

と語る氏の言葉には、ベートーヴェンへの深い思いが感じられました。そしてベートーヴェンの音楽に対しても、私達は全人格をかけ、愛情のすべてを注ぎ込まなければ、彼の音楽の大切なものは、すべてこぼれてしまうでしょうと、音楽を理解するのに愛情がどんなに大切かを黒岩氏が説くとき、私は氏の演奏が人をあれだけ感動させるその源は「愛」だということに気がつきました。黒岩氏の音楽はやはり神からのものなのだ、と。

同窓会組織について

昨年5月以来、本年2月まで、従来の同窓会を再検討する為、中高、大学、家政科、音楽科の各単位より選出された組織検討委員が計8回の熱心な討議を重ねて参りました。

これまで、フェリス同窓会全体は白菊会と云う一つの組織にまとまっておりますが、音楽科同窓会もその中の一単位として活動して参りましたが、今後は各単位がそれぞれ独自の同窓会として新しい歩みを始めるとなりました。その新組織についての案が2月17日の白菊会常任委員会、3月5日の白菊会クラス幹事会で次の様に決定致しましたので御報告申し上げます。

- 1. 組織について
・四年制大学—大学同窓会(りてら)
・短期大学—家政科同窓会(Dグループ)
音楽科同窓会(Fグループ)
・高等学校—高等学校同窓会(フェリス白菊会)
2. 連絡協議会(仮称)の設置
連絡協議会(仮称)は各同窓会の会長、副会長が構成員となり、対外的、対内的連絡活動にあたります。
3. 地方支部
地方支部については従来通りで、音楽科では、現在九州支部、中部支部があります。
4. 資産
昨年、徴収させていただきました追加通信費は各同窓会に分配します。
従来の長期積立金は、今後も全同窓会ファンドとして残し、連絡協議会(仮称)が責任をもって保管します。
5. 会費
各々の同窓会が独自に徴収するものとします。
なお、音楽科同窓会では、入学時に終身会費として3万円納入していただく事になりました。
音楽科同窓会といたしましては、今まで同様活発な活動を続けて参りたいと存じますので、今後とも皆様のお協力を賜わりたく、よろしく御願い申し上げます。

Fグループ新役員=。会長—中島恭子(9回)。副会長—熊取谷寿子(16)・大熊慶子(25)。会計—藤村公子(11)

大滝潔美(29)。書記—細矢紀子(1)熊取谷寿子(16)
・執行—村瀬潤子(11)大熊慶子(25)永井晴子(15)会報—鈴木みどり(27)岩井周子(29)。当番幹事—池田孝子(11)大谷園子(11)太美奈子(31)丸茂陽子(31)
尚今年度、御勇退される方は次の皆様です。大島君子(3)伊藤多恵子(10)桑原妙子(10)岩崎雅子(12)熊本美也子(17)初山美保子(19)長い間御苦勞様でした。

シュタイナー学校での9日間

藤村公子(11回)

去年の夏のヨーロッパでのアルバムを眺めていると再び心が生返ってくるようです。

写真に見る自分の顔は照れ臭い程うれしそう……。40才過ぎの主婦が家族を置いて初めて出かけたのですから。2ヶ月の旅の途中「次の部屋はどんなだろう」と胸をおどらせ、そのドアをそっとあけてみる心境でした。

まずドイツのシュタイナー学校で開かれた教育セミナーに参加しました。ドイツの哲学者ルドルフ・シュタイナーの思想、或はそれに基づいた教育に興味のある人なら誰でも参加出来ます。千人位の参加者は25才から40才位のドイツ人がほとんどで、(日本人は10人位)学校の教師が多かったようです。朝はまず8時からコーラスの時間です。うっかりすると指揮者も見えず背の高い人達の谷底にいるような事にもなりましたが、それはそれでまわりからの声のハーモニー(特に男声の)を楽しみました。まずハミングで各自好きな音をそっと響かせます。するとホール全体は蜂のうなり声のようです。お互いに耳を澄まして行くうちに全体がある一つの和音にたどりつきます。又、シューベルトのミサ曲をカルテット伴奏で最終日の音楽会迄に仕上げました。次の時間は講演で、例えば「人間の本性は過去の成長と未来の生を表現する……」など、日本語であっても私には格調高過ぎるので、散歩の時間ときめました。そこは小高い丘の上で、下の方からは教会の鐘がきこえ町全体も見わたせました。すぐ裏の方にある学校附属の農園を歩いていると、そこのおじさんに有機農業について詳しい説明を長々ときかされてしまいました。

11時からは各自好きなテーマの小グループにおかれます。私はシュタイナー学校の12年間の音楽教育というのを選びました。この学校ではどの課目も芸術とか表現と深く結びついているので、音楽は重要なのです。小学1年生のペンタトニックからの導入に始まり、今実際に子供達に授業をして居られる先生がピアノを弾きながら話されます。先生の素晴らしいピアノと音楽性、熱心さ、又クラスの人達の率直な質問、態度を感じる事が出来ました。きっとあの東洋人、ドイツ語がわからなくてたいくつだろうと同情されていたにちがいないが。さてお昼の時間はたっぷり3時間、農園で取れた野菜とか自然食に近いメニューを学校の父兄、生徒達の手作りで食べる事が出来ます。話しかけてくる人の多いのにうれいけれど疲れる昼食でした。午後の部は芸術実習で、私は指揮法とオリエントミー(他には詩の朗読、発声、絵画、彫刻、リコーダー等がある。)をやり、和気あいあいとおどける若い人達を眺めたり、楽しいものでした。夕食のあと夜の10時迄(私以外の人は)又むずかしい講演をききます。遠足の日を除いてこんな毎日が9日間続きます。言葉も不自由、予備知識も不充分、そんな条件でもかく飛び込んで行きました。この先生達の眼差しは道ですれちがう他のドイツ人とはちがう……集まっている人達にもそれと共通した雰囲気がありました。もしかしたら、特殊な世界なのかも知れないけれど、そこにはシュタイナーの世界の何かがしみ出して私に働きかけているように感じました。それは私を毎日に率直に自分らしくし、意識を活性化させてくれました。自分を素直に表現し五感、感性を総動員して何とか物事の本质に近づこうとする。言葉に頼れない事がかえってシュタイナーの精神に近づくのを助けてくれたのかもしれない。心と体がひらいていくというのは、もしかしこういふ事なのかなあと思ったりしました。

中部支部だより

支部長 峯 沢 紘 子 (14回)

Fグループ中部支部は2年目を迎えました。昨年の発表演奏会は補助椅子が出る程盛会に終り、先生方の演奏には「アンコール」「ブラボー」が場内に響いておりました。中部で存在感のうすかったフェリスも少しずつ認めて頂ける様になり、ヤマハも全面的に応援してくれており、とても心強いことです。しかし、成功の蔭には、やはり同窓生皆様のお力添えがあったればこそと感謝しております。ここで改めて御礼申し上げます。

今後の活動予定としまして、一般の方々を対象とする音楽会、公開講座を一年おきに開いてゆきたいと考えております。今年は11月にヤマハホールで、希望の多い「幼児教育」のセミナーをもつことになっております。お迎えする講師、日程等は未定ですが、近々準備を進めて行く心算です。又、父兄にフェリスを広め、そのジュニアが何れフェリスの同窓生になることを願って、現在同窓生が教えている生徒を集め、第1回ジュニアコンサートを去る4月3日(日)ヤマハホールにて開催致しましたが、この会は今後も、毎年春に行なっていきたいと思っております。

まだまだフェリスの同窓生は他の学校に較べ人数が少ないのでやりにくいこともあると思いますが、しかし、人数が少いだけに団結してやってゆきたいと願っております。今後ともよろしく御願いいたします。

総会並びに研修会の御案内

来る6月5日(日)午後1時より、音楽科524教室におきまして、本年度Fグループ総会を行ないます。また、総会の後、今年井上直幸先生を講師にお迎えして、スカルラッチェとドビッシーについての演奏と対談による研修会を開催致しますので、同窓生以外の方も誘い合わせの上、多数御来会下さいませよう。御案内申し上げます。

研修会：6月5日(日)午後2時より541教室
会費：会員1,500円 一般2,000円 学生500円
(会費は当日会場にて御支払い下さい)

Fグループ後援演奏会

- '82 12月10日(金)神戸愉樹美(20回)
ヴァイオリン・ダ・ガンパ・リサイタル 石橋メモリアル
12月23日(木)岡本佐知子(29回)
ソプラノリサイタル イイノホール
'83 1月9日(日)鈴木康子(30回)
フルートリサイタル 青山タワーホール
4月7日(木)熊本美也子(17回)
ピアノリサイタル 青山タワーホール
'83 5月29日(日)大島君子(3回)
ピアノリサイタル 茨城県神栖町文化センター
曲目：ハイドン「主題と変奏」他
11月8日(火)鈴木みどり(27回)平井美智代(32回)
ピアノと歌による
ジョイントリサイタル 県民小ホール
曲目：シューマン「謝肉祭」他
ブラームス・リート「静かな春」他(以上敬称略)
尚、今年より後援は3ヶ月前までに申し込み用紙に御記入の上、大熊慶子まで御申し込み下さい。申し込み者多数の場合には、役員会にて決定させて頂きますので御了承下さい。申し込み用紙は下記まで、御請求下さい。

大熊慶子

昭和57年度会計報告 (昭和58年3月末現在)

Table with 2 columns: 収 (Income) and 支 (Expenditure). Rows include 前年度繰越金, 57年度経身会費, 総会費, etc. Total income is 10,102,283 and total expenditure is 1,734,584.